

芸術は、社会の中で何を可能にしているのか

歴史と人々の経験から、その働きと可能性を問い直す

誰にとって、
どのような場面で、
何を可能にしているのか。

作品をつくる。味わう。経験を表現する。そうした営みは、人と社会にどのような意味を持つのか。
本シリーズでは、歴史・研究・実践をたどり、受け継ぐべきもの、見直すべきもの、新たに試す可能性を考える。



歴史

これまでの歩みから
何を学べるか



人々の経験

どのような人に
どのような変化があるか



評価・市場

どのように評価され
どのように広がっているか



仮説

そこからどのような
仮説が考えられるか



今後の可能性

これから社会に
どのような価値を生みうるか

芸術がひらく、
よりよい社会のこれからを、ともに考える。



表現がつなぐ
人・社会・未来

価値は、一つの尺度にまとめない

好き・評価・価格・公共・継承は、分けて考える。



個人の経験

つくること、味わうことが、
その人にどんな意味を
持つか。



芸術的・歴史的な評価

何を受け継ぎ、
何を更新したか。



市場での評価

誰が、いくらを
支払うか。



公共的な価値

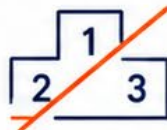
他者や将来世代に、
何を残し、何を可能に
するか。



営みを続けるための価値

技術、知識、場所、
担い手を、どう継承
するか。

この五つは、
順位ではなく、**問いの違い。**



「高く売れる＝社会的に重要」ではない。

「価格で測れない＝何でも正当」でもない。

芸術がひらく、
よりよい社会のこれからを、ともに考える。

表現がつなぐ
人・社会・未来



歴史をたどると、芸術の働きは一つではない

時代や地域によって形を変えながら、芸術はさまざまな役割を果たしてきた
歴史をたどると、芸術は「美を楽しむ」だけでなく、人と社会の中で多様な働きを担ってきたことがわかる。



芸術がひろく、
よりよい社会のこれからを、ともに考える。



① 新しいものを生むだけではない

② 役割は一つではない

③ 「新しい役割」の前に、既にある働きを確かめる

作品を届けることと、人々の営みとして成立することは別

芸術は、見るだけでなく、参加し、表現し、ともに決め、続けていく中で、
人々の生活の一部となっていく。



参加しない人にも
理由がある

- 内容が合わない
- 時間・費用が合わない
- 別の営みに意味を感じている

『来場した』『満足した』だけでは足りない。
必要な人に届いたか、続けられる条件があるかも見る。

芸術がひらく、
よりよい社会のこれからを、ともに考える。

表現がつなぐ
人・社会・未来



市場価格・専門評価・社会的な意味は同じではない

それぞれの視点を理解し、重なりと違いを見極める



市場価格

その条件で、
誰が、いくら払うか

需要と供給、買い手の好み、時期や
場所などにより、いくらで取引されるか
を示すものです。



専門評価

先行実践との関係や
技法上の達成をどう見るか

美術史・批評・保存修復などの専門的
知見に基づき、作品の位置づけや
意義を評価するものです。



社会的な意味

人々の生活や将来に
何を残すか

教育、地域の文化、対話や多様性など、
社会にとってどのような価値や影響を
もたらすかを考える視点です。

取引の流れと、収入や支えになる範囲



初回販売

作家・制作側に収入が
入ることがある



再売買

所有者間の取引が中心で、
次の制作や教育を自動的に
支えない

別の問い：取引の透明性



高価格 = 不正、とは言えない。
透明性と価値は分けて
確かめる。

高い価格が付くことと、次の担い手を育てることは同じではない。

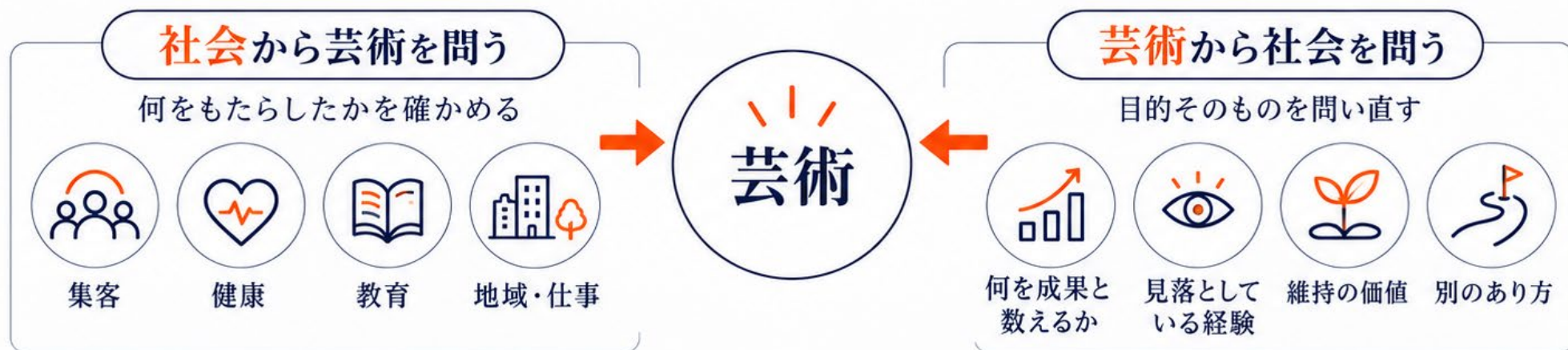
芸術がひらく、
よりよい社会のこれからを、ともに考える。

表現がつながる
人・社会・未来



芸術は社会に何をもたらすか。 同時に、**社会の目的**も問い直せるか

芸術は社会にさまざまな価値をもたらす。だからこそ同時に、
社会が何を目的としているのか、その前提を問い直すこともできる。



例：メンテナンス・アート

新しいものを生むだけでなく、都市を支える維持の仕事に光を当てた。



社会への貢献を問うことと、社会が何を大切にするかを問い直すこと。
その両方で考える。



今後の検討に向けた五つの仮説

歴史と人々の経験から、芸術の可能性をさらに検討するために

これまでの考察をもとに、今後、検証すべき五つの仮説を整理した。

いずれも仮の問いであり、データや事例に基づいて丁寧に確かめていくことをめざす。

1



目的と経験は
ずれていないか

説明している価値と、
実際の経験を比べる

2



生活の中の価値を
捉えきれているか

制度の外にある
制作・鑑賞も見る

3



体験後に
続ける条件はあるか

場所・道具・関係が
残るか

4



つくること
見方や問いは変わるか

制作の前後で
何がかわるか確かめる

5



利益と継承資金は
つながっているか

価値の受益と、
教育・制作の費用負担をみる



仮説は結論ではない

反証の可能性を含めて確かめる。領域ごとに併存もありうる。

一つの実践から、芸術全体を肯定も否定もしない。

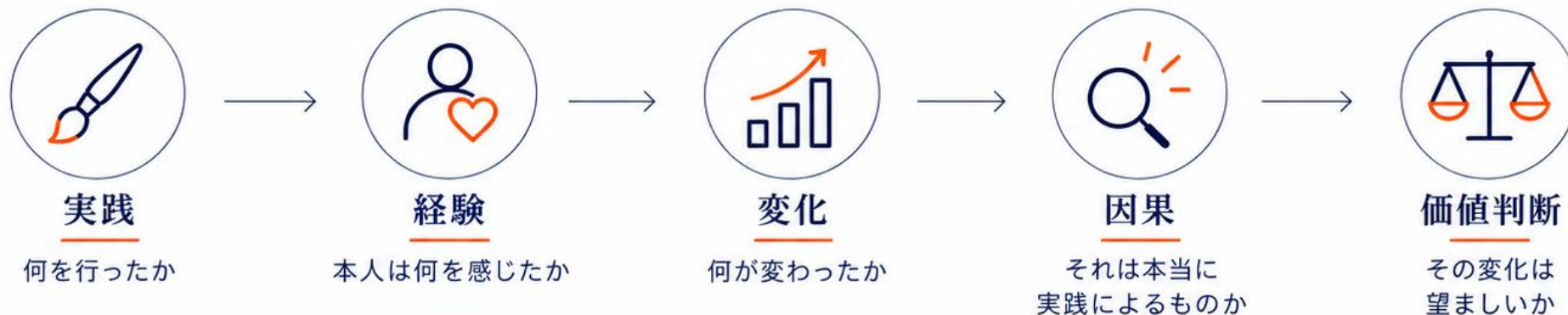
芸術がひらく、
よりよい社会のこれからを、ともに考える。

表現がつなぐ
人・社会・未来



可能性は、効果を言い切る前に確かめる

芸術の実践は、すぐに「効果」として語れるとは限りません。
一つひとつの経験を丁寧にたどり、何が起きたのかを確かめることが、
より誠実で、豊かな可能性の発見につながります。



設計例: 「待つ経験」を形にする



「大切な経験だった」と
「効果があった」は
同じではない。

変化がないことも、ただちに失敗ではない。

芸術がひらく、
よりよい社会のこれからを、ともに考える。



表現がつなぐ
人・社会・未来

歴史と仮説から考えられる、今後の五つの可能性

これまでの歩みと人々の経験から見えてくるのは、
芸術が社会の中で広がっていき、さまざまな可能性です。



自分の経験を、
自分で扱える

まだ言い切れない
感覚や経験を
形にできる



見方・問い・価値を
つくり直す

つくる過程から、
考えが生まれ変わる



維持・修復・継承を
見直す

目立たない営みの
価値を捉え直す



当事者の経験を、
共同の判断へつなぐ

問いを広げ、
事実確認と判断へ
つなぐ



成果を求められずに、
つくり、味わえる

役に立つかどうかだけ
で評価しない

新しい効用を足すだけでなく、
すでにある働きを、社会の中で成立しやすくする。



表現がつなぐ
人・社会・未来

結論

芸術の役割を一つに決めるのではなく、 その働きを確かめ、成立する条件を増やす。

芸術は、社会の中で多様な人々の経験と関わりながら、さまざまな可能性をもつ。
その可能性を広げるために、次の四つの視点をもって取り組むことが重要である。



区別する

好き嫌い、専門評価、
市場価格、公共的な意味を
分ける



確かめる

誰に何が起きているか、
事実と仮説を区別して見る



継承する

技術、知識、場所、
表現の自由を守る



試す

まだ十分に成立していない
可能性を、検証しながら
広げる

これからも考え続けるための、四つの問い

- ① 誰にとって
大切な経験か
- ② どの過程で
何が生じているか
- ③ 誰には届かず、
誰に負担があるか
- ④ 何を残し、何を見直し、
何を試すか

芸術の可能性は、新しい効用を付け加えることだけでなく、
人々自身の営みとして続けられる条件をつくるところにもある。



お問い合わせ・会社情報



33.8万人

のデータに基づく

組織で働く成人の研究と教育開発

組織行動科学®

Organizational-Andragogy®



お問い合わせ：
判断デザインラボラトリー



E-mail：
request@requestgroup.jp

【会社情報】 リクエスト株式会社

- 本社：〒160-0022 東京都新宿区新宿3丁目4番8号
京王フレンテ新宿3丁目4F
- 会社概要：<https://requestgroup.jp/corporateprofile>
- 代表取締役 甲畑智康：<https://requestgroup.jp/profile>
- 公式サイト：<https://www.requestgroup.jp/>

【企業概要】

リクエスト株式会社（本社：東京都新宿区、代表取締役：甲畑智康）は「より善くを目的に」を掲げ、**980社・33.8万人**の働く人達のデータに基づいた組織行動科学®を基盤に、8つの研究機関からなる企業です。

組織行動科学®は組織で働く私達の思考と行動が「なぜ起こり・なぜ続くのか」を事業環境と歴史・経験から解明し、より善く再現する手段です。

リクエスト株式会社の8つの研究機関



Behavioral
Robotics®
(HOBiROA®) 総研



smart creative
management®
総合研究所



OrgLogLab®
(組織論理学®
研究センター)



XR HRD®
(AIAndragogy®)
研究センター



ABA
Operations
Research®
センター



人的資本開発
プランニング®
センター



判断デザイン
ラボラトリー



公共行動
研究室®

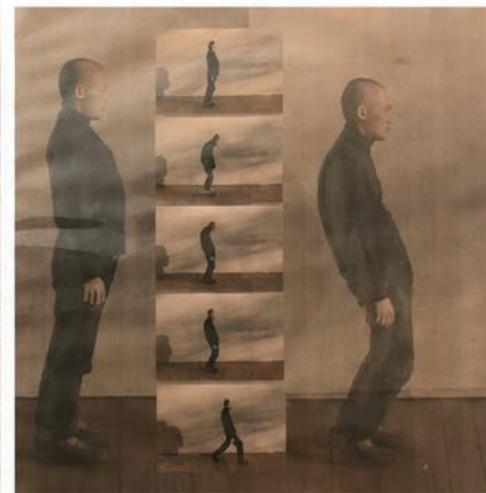
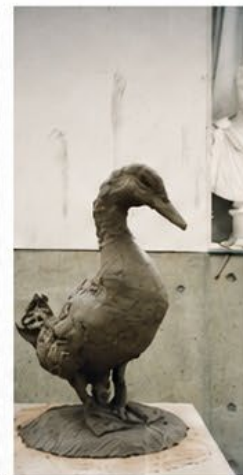
芸術実践から、 判断研究へ

代表・甲畑智康の原点 —

東京藝術大学での制作経験と、
現在の組織行動科学®・判断デザイン研究をつなぐ。

甲畑智康は、2003年に東京藝術大学美術学部を卒業し、
身体・空間・立体・素描・行為の制作を通じて、
既存の言葉だけでは捉えきれない現実に向き合ってきた。

その後、企業現場での人材育成・組織開発・判断研究へと
実践領域を広げ、現在は組織行動科学®を基盤に、
判断デザイン・判断経験設計・判断構造設計Proの
体系化を進めている。



1

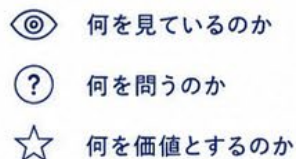
芸大時代の制作



身体・空間 立体 素描 行為

2

問いの継続



何を見ているのか

何を問うのか

何を価値とするのか

3

現在の研究・実践

- 組織行動科学®
- 980社・33.8万人のデータに基づく研究と実践
- アート思考＝判断前提生成
- 判断デザイン・判断経験設計・判断構造設計Pro

芸術の実践は、答えを急がず、
現実との関係をつくり直す経験だった。
そこから、アート思考を
『判断前提生成』として捉える
視点が生まれた。

正解がない仕事でも、 自分で判断し、前に進められる。



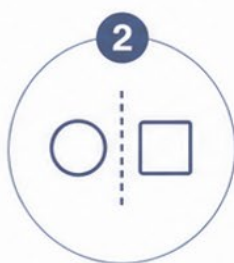
良い行動が生まれる上流には、必ず判断がある。

判断の質が、行動の質と成果を決める。



現場の事実を見る

目的に照らして、
何が起きているのかを
客観的に見る。



違いを捉える

理想と現状のギャップや
パターンの違いに
気づく。



判断する

基準に照らして、
何を優先し、何を
選ぶかを定める。



行動する

判断に基づいて、
自分で決めて
動き出す。



反応・結果を確かめる

相手の反応や結果を
確認し、事実を
集める。



判断基準を更新する

得られた事実から
基準を見直し、
精度を高める。

このサイクルが、判断できる組織をつくる。